

Kappa Novels



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 ^{ワルツ} ダイナマイト円舞曲

昭和48年12月10日 初版発行

著者 小 ^{いずみ} 泉 喜 美 子
東京都中央区築地2-1
秀和築地レジデンス908

発行者 五十嵐 勝 彌

印刷者 堀 内 文 治 郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光 文 社
振替東京115347 電話 東京(942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(関川製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Kimiko Koizumi 1973

(分)0-2-93(製)02243(出)2271 (0)

長編推理小説・書下ろし

ダイナマイト^ワ円舞^ル曲^ツ

^こ ^い ^ず ^み ^き ^み ^こ
小泉喜美子



カッパ・ノベルス

目次

第一章 或る貴婦人の肖像……………6

第二章 目かくし遊び……………38

間奏曲 インタメッツォ……………64

第三章 樂園追放……………67

間奏曲……………82

第四章 最後の晚餐 ばんさん……………86

間奏曲……………103

第五章 狩獵の場面……………106

間奏曲……………138

第六章 標的を射る神々……………142

第七章 聖ジョルジオと竜……………175

イラストレーション

竹久不二彦

『そうそう』と彼女は突然
言った。『いらっしゃい、
彼がいつでも幼児たちのの
どを切っていた部屋におつ
れますから』

——G・バタイユ

『ジル・ド・レ論』

第一章 或る貴婦人の肖像

1

《地中海航空》^{メディテラネア}は、それが根城^{ねじろ}としてゐる地域の風土と同じく、あまり几帳面^{じんけんめん}とは申しかねる。おかげで、宮殿に到着するのが予定より二時間半遅れた。

かつらをかぶり、金モールずくめのお仕着せに身を固めた侍従長が出て来て、こっぴどく叱られるのだろうと思つたら、はたしてそのとおりになった。

ただし、かつらはかぶってゐなかつた。金モールもわたしの妄想だった。彼は砂色の髪、砂色の眼、非常に仕立てのいいダークスーツに長身を包んだ、風采満点の中年紳士で、宮殿正面の大階段を音もなく降りて来ると、わたしの前にすくと立ち、慇懃^{いんぎん}に、しかし、きわめて冷ややかにわたしを見下ろした。その氷のような凝視には

百千の非難にまさる何かがあり、わたしの心臓はいっぺんに縮み上がった。

「ごめんなさい、飛行機がニースで——」

（立往生した）というロンバルド語を思い出そうと、わたしが頭の中で悪戦苦闘しているあいだに、侍従長は礼儀正しくうなずき、非の打ちどころのないフランス語を使つてくれた。そのフランス語には、かすかな北イタリヤ訛^{なま}りがあつた。

「ようこそおいでくださいました。公妃殿下には、ことのほかお待ちかねでいらっしゃいます。ただちにお居間へご案内申し上げますゆえ、なにとぞ、私のあとにおつづきください」

言訳^{いわけ}の残りの部分をわたしはほっと呑みこみ、いったん床^{ゆか}に置いた重たいスリッパの一群をふたたび持ち上げるべく、身がまえた。

すると、それは、いつのまにかわたしの背後に忍び寄つてゐた、勤務成績満点の一人の従僕の手によって、あつというまに、かつさらわれていつてしまった。

侍従長のあとにつづいてあわてて大階段をのぼりながら、わたしは、本来の所有者のもとを離れて全然べつの

方角へと運び去られつつあるスーツケース群の行方を、一瞬、未練がましく振り返った。

（——まあ、いいや。団体旅行の温泉宿とはちがうんだから、あとで在りかがわからなくなつて、番頭と一悶着起こすなんてこともあるまい。それに、もし万一、そんなことにでもなつたら、クレマンティーヌに全責任をとつてもらうからいいわ）

ここまで考えてから、わたしは自分のみみっちい思考方式に自分でうんざりした。こんなところまで来ても、人間はなかなか早急には自己を改革できないものなのだ。十何時間か前に発つてきた東京のあの世界と、ここはこんなにも異なつていゝというのに！

わたしはますますうんざりし、そのぶんだけ先導者に遅れそうになつたので、息を切らせて足を早めた。先導者の脚は長く、歩幅は大きく、姿勢は堂々として、いかなる王族よりも王族らしさにあふれているように思われた。

こんなしょっぱなから、わたしは感心ばかりしていいのだろうか？

それでなくても、宮殿の正門をくぐつた瞬間から正面

玄関の車寄せまで、さらに入口の大ホールへとたどりつくまでに見かけた、何人かの威風堂々たる、小粋な軍服姿の近衛兵たちの集団に、圧倒されかけていた直後だというのに。侍従長や近衛兵たちがいかに立派に見えようとも、彼らはこの王宮の一介の使用人にすぎないのであり、わたしはクレマンティーヌ公妃の、「私的な」とは言え、正式の賓客であることにまちがいはないのだから。

わたしたちは歩きに歩いた。廊下、回廊、階段、また廊下。広い家に住むのもらくじゃないと考えながら、息をはずませはずませ、わたしはついて行つた。三太夫のあとに従つて行く八五郎そっくりだった。

廊下はどこもかしこも見事な天然大理石で、その中央には細長い濃紺の天鵝絨の絨毯が、どこまでもどこまでもとぎれることなくつづいていた。内廷費も少しは苦しいと見えて、絨毯は隅のほうがところどころすり切れていた。

柱も階段も大理石だった。このほうは申し分がなかった。それもそのはず、この王国の位置するこの地方は、ヨーロッパでも指折りの天然大理石の産地であつて、なまじの新建材よりよほど廉くつくらしいのである。

それにしても壯観だった。

わたしは、クレマンティーヌがパリの安下宿の一室をわたしと共同で借りていたところ、とぼしいお湯のシャワーで身体を洗いながら、総大理石の浴室にあこがれていたことを思い出し、彼女のために心から祝福したい気持ちでいっぱいになった。この調子なら、浴槽はもちろん、たんつぽまで大理石製だろう。

廊下の左右には、きちんと間隔をおいて、がっしりした檜材の扉が並んでいた。そのどれにも、天使や宝剣や巻物や、それからこの王室の正規の紋章であるアネモネの花のデザインなどをあしらった彫刻がごてごてと施されていた。それらを完成させた彫刻家の恐るべき執念と忍耐力とにわたしは驚嘆した。きつとその人は、よほど、ほかにすることがなかったのにちがいない。

どの扉も、わたしの邪な好奇心を断固拒否するかのよう、びったりと閉ざされており、その内部では、廷臣たちが重要会議を開いているのか、非番の侍従がさいころばくちに興じているのか、それとも単に、掃除用の箒が吊るされてあるだけなのか、わたしにはいっくうに見当がつかなかった。

実際のところ、わたしは、ここに到着するまでは、ただなんとなく、宮廷の要所要所には、燭台や儀仗を捧げ持った真紅のお仕着せ姿の従僕たちがひっそりと控えていて、その前をわたしたちが通りかかると、無言のまま、うやうやしくお辞儀をするといったような、優雅な十八世紀的光景の展開されることを期待していたのだが、見渡した限りでは、そんな気配はおろか、人影一つ見当たりはしなかった。

わたしは昼寝の時間に到着してしまったのであろうか？ 侍従長は寝込みを叩き起こされて、それでこんなにつんけんしているのだろうか？ あるいは、当節は王室といえども人手不足で、日本の百貨店のエスカレーター係のごとき存在に月給を支払ってはいられないのだろうか？

やがて視野がひらけ、片側が全部、窓になった。窓枠にも相変わらず、天使と宝剣とアネモネの洪水。金糸の織物のカーテン。カーテンはすっかり開け放たれており、その向こうに、白い、広々とした露台が望まれた。

よく手入れの行きとどいた庭園のスロープ。ところどころに据えられているキューピッドやアポロやダイアナ

や、その他数々の、ギリシャ神話の登場人物らしき男女の彫像。白いベンチとテーブルと、ライラックの花叢。^{はなむら}きちんと刈りこまれた庭木と、その背後につづくオリブの茂み。深い森。

そして、それらすべてののはるかかなたに、地中海が——つい今しがた、わたしがいらいらしながらその上を飛んで来た、あの青い、眠れる海が、とろりとした五月の陽光の下で静かに波打っていた。

あまり窓の外の景観に氣をとられていたせいか、睡眠不足のせいか、それとも絨毯のほころびに足が突っかったのか、いずれかの理由によって、わたしはあやうく前によろけなかった。大理石とまともに接吻するのだけは、どうにか免れた。^{まぬが}

「大丈夫ですか？ お嬢さん」

侍従長がさすがに振り返って、手を貸してくれようとした。砂色の眼の冷たさはたいして改良されてはいなかった。むしろ、先刻より、もっとひどくなっていた。

わたしは矜持^{けいじ}にかけてもその手を払いのけた。

「大丈夫ですわ。あの——ただ——ちよっと、海に氣をとられていたので」

「海がお好きですか？」

彼は訊ねた。^{たずね}やや唐突に。

「べつに、それほどには」

わたしは答えた。

「でも、地中海を見るのは初めてなのです。初めてのものを見るのは、わたしはなんでも好きですわ」

「ほう？」

かすかに、侍従長は片方の眉を上げた。

「あなたのご経験では、この世の中のたいていのものは初めてでしょう？」

わたしは非常に若々しく、非常に清純に見えたらしい。あるいは、非常に子供っぽく、非常に無知に見えたらしい。

「とにかく、しばらくお休みください。公妃殿下のお居間までは、まだ、もう少し距離があります。それ、その……」

窓際の一角にそれとなく配置された休息用の椅子の一つを、侍従長は指した。

「お好きなのに腰をお下ろしく下さい。あなたの脈搏の数が平常に戻るまで」

今度は意地は張れなかった。わたしは臨月の産婦みたいに肩で呼吸をしていたのだ（もちろん、実際の臨月の経験は、皆無だった）。

侍従長の示すままに、わたしは王朝風の椅子の一つにたどりつき、ハンカチでそつと額をこすりながら、黙って窓の外を見つめた。侍従長のほうは、なんとなく、見なくなかったからだ。

左手の露台を隔てた向こうのムーア式の回廊を、誰かが歩いて通り過ぎるのが望まれた。顔も性別もさだかならぬほどの遠さだった。どうやら、女官の一人らしい。人影はちらりとこちらを見やり、すぐまた足を速めて遠ざかってしまった。

「あなたが初めてごらんになるものは、この国にはいろいろとありますよ、お嬢さん」

気がつく、侍従長の声がわたしの耳もとで聞こえていた。

彼は、わたしの傍の椅子に腰を下ろしていた。眼はさぐるようにわたしを見ていた。全体としての態度は尊大で、宮廷の客を迎える番頭役というよりは、この荷物を一刻も早く配達先へ届けてしまいたがっている運搬人の

憂鬱をただよわせていた。

でも、なんという無作法な運搬人だろう。客人たる淑女の前で平気で腰を下ろすなんて。ヨーロッパでは、男性の作法^{マナー}としてはこれは最低ではないのか。

それとも、わたしは彼の眼にはたいして淑女とは映らないのであろうか？ いや、それとも、彼もまた、見かけによらず「職務の重荷」にあえいでいる、一人の疲れた中年サラリーマンにすぎないのだろうか？

わたしは一瞬、解釈に迷ったけれども、考えてみれば、公妃の賓客としてこのような人物を出迎え、案内し、競歩大会まで行なわねばならぬということは、教養ある式部官にしてみれば、自己^{おのれ}の運命を呪いたくもなる出来事だったのにちがいない。そう結論して、ふたたび歩きだしたころには、わたしは彼に共感すらおぼえていたくらいだった。

ついに、一つの扉の前で侍従長は足を停^とめた。競歩大会は終わったのだ。

丁重に彼はノックをした。扉は内側から開かれた。侍従長は、もったいぶった態度で高らかにわたしの来訪を告げた。今度は純粹のロンバルド語中心だったので、わ

たしの語学力ではそのすべてを明確に理解することはむずかしかったが、途中でわたしの名前がべらべらと発音されていたから、たぶん、そうだったのだろうと思う。

たちまち、わたしの両膝はふるえはじめた。疲労のためではなかった。五秒ほどだったが、わたしの心は猛烈に後悔していた。

（来なければよかった！ 来なければよかったんだわ！これから側近連中や「月卿雲客」の居流れる中を公妃殿下の御前に引き出されて、「日本から来た小さなお猿さん」として嘲（わら）いものにされるのよ。ああ、いくらクレマンティーヌの招待だからといって、貯金まではたいて支度をして、はるばるやって来るなんて！）

だが、侍従長はすでにわたしの到着報告を奏上し終わっていた。扉を開いたロンバルド人の女官たちは、大いなる敬意だか物珍しさだかをもって、おごそかに訪客を迎えようとしていた。

今や、ラッパは吹き鳴らされた。賽（さい）は投げられたのだ。——わたしは大きく一つ息を吸いこみ、はいつて行つた。

2

「あなたが「公妃殿下」になっちゃうなんて、考えもつかなかったわ、クレマンティーヌ」

とわたしは言つて、ついでに青い絹張りのロココ風の長椅子の上で、うんと一つ大きく伸びをした。

長旅の疲れはまだとれていなかった。緊張だつて、まだけつして。

でも、わたしは、三十分前までは考えもつかなかった格好で、すっかりくつろいでいた。伸びをしようが、あくびをしようが、わたしをとがめる者は誰もいなかった。「ハリウッドで売り出したとか、カルダンのところのトップ・マネキンに引き抜かれたとか言うのだったら、まだ話はわかるのだけれど」

「映画界は不景気なのよ」

クレマンティーヌはすまして答えた。

「それに、わたくしは絵のモデルでも流行（モード）のモデルでもなかったのよ。わたくしとあなたとは、まじめな画学生だったのよ」

「だから、なおさらなんだわ、画学生から公妃殿下だなんて！」

わたしの口調はうわずっていて、よほど滑稽こっけいに聞こえたにちがいない。公妃になったのはまるで自分自身でもあるかのように興奮していたのだ。

ちらりとこちらを見やりながら、手ずから午後のお茶を注いでくれているクレマンティーヌのほうが、ずっと落ち着いて冷静に見えた。もっとも、彼女より以上に落ち着いて冷静に見える存在といったら、ミロのヴィーナスぐらいしかわたしには思いつかなかったのであるが。

クレマンティーヌは頬すら染めなかった。その完璧かんぺきにととのった美しい顔は、いささか貧血気味と思われるくらい白暫はくせきで清潔だった。その点もミロの傑作によく似ていた。似ていないのは、彼女にはちゃんと二本揃った両腕と、すばらしい開拓者精神バイオニア・スピリットとが具そなわっているという点であろう。

「現代は民主主義の時代なのよ、ちびちゃん」

と、彼女は言った。それから、急いでつけたした。「ここはちがうけれど」

「ちびちゃん」というのは、モンパルナスの安下宿以来

のわたしの愛称だった。わたしの身長は一六〇センチメートルあるが（体重は秘密）、それでも、あそこへ絵や彫刻の勉強をしに集まって来ていた世界各国の種々雑多な連中のなかでは、わたしが一番ちびだったのだ。

「お針子はりこや女学生からお妃きさきを選ぶのは、当節の王室の流行はやりなのよ。シッキムの王妃はアメリカの女子大生だったし、北欧のどこかの国の皇太子はデパートメント・ストアの売り子を生涯の伴侶に定めたわ。そう言えば、あなたの国の皇太子だって粉屋こなやの娘をお妃に選んだそうじゃないの」

「ばかね、粉屋といったって、あれは大企業の……」

わたしはやめた。その話をクレマンティーヌにいくら説明したって無駄というものだろう。

その代わり、わたしは、無作法を百も承知の上で、室内をじろじろと観察することにした。

そこは公妃の私室の一つで、「アネモネの間ま」と呼ばれる一室なのだそうであるが、私室であれ公室であれ、宮殿なんてものの奥深く足を踏み入れたのは、これがわたしの最初の経験なのだから。

それは、すべての若く、ロマンティストで、きれいな

ものの好きな、正常かつ健康な女性なら、春の夜にかならず一晩ぐらいは快こころよくうなされつつ見るにちがいない夢を、そのまま具現したような部屋であり、わたしにとって、外国映画か外国雑誌のグラビアの中でしかお目にかかったことのない別天地だった。

ロココ風の白と金と青との調度類。アネモネの花柄を織り出した、分厚い絨毯。同じくアネモネ模様の掛け布タペストリー。水晶のシャンデリア。マントルピースの上のこまごました美術品。

だが、なんと言っても一番目を惹くのは、一方の壁の天井から床までいっぱいを占領して掲げられてあるクレマンティーヌ自身の全身像を描いた肖像画だった。

お抱えの宮廷画家が、大公と新公妃とのご機嫌を汲々ととり結びつつ、大枚の謝礼金と勲何等かを目当てに描いたにちがいない、昔ながらの紋切り型の、おもしろくも変哲もない絵。クレマンティーヌの魅力はそこでは完全に死んでいた。

彼女は鮮かな緑色の中世風の裾長の服を着て、同じ色の手袋を持ち、かるく微笑しながら、おとなしくポーズしていた。ティントレット描くところの『或る貴婦人の

肖像』そっくりに。

その輝くばかりの緑色の服と手袋とは、彼女の瞳の色にたいそうよく似合って見えた。しかし、こんな古くさい画風では、ティントレットといえども、クレマンティーヌの魅力の半分も写しとることはできない。

そして、その壁のさらに奥に、愛し合う高貴の夫婦の寝室があるのだろうが、そこまではわたしも覗くのを遠慮した。

ティー・テーブルの上の銀器からは、いい香りの湯気がさかんに立ちのぼっていた。干し無花果入りの熱い焼き菓子。舌の上ですぐさまとろけてしまいそうなエンジェル・ケーキとプティ・フールの数々。

クレマンティーヌが女官たちに人払いを申し渡したので、わたしたちの不謹慎きわまる、しかし友情にみちみちた会話を聴いているのは、一隅に据えられた、單なるお飾りにすぎないらしい金色燦然たるハープこんじきざんぜん（なぜなら、クレマンティーヌがハープを弾くという話は、わたしはついぞ耳にしたことがなかったから。ギターなら、モンマルトルでのつらい絵の修業の気分転換のおりおり、蚤の市で買って来た一番安いやつを、彼女がときおり、ぼ

ろんぼろんかき鳴らしていたことは覚えているが）のか
げで、つまらなさそうに寝そべっている二頭の巨大なグ
レ！ハウンドだけだった。

この犬たちは、さきほど、わたしがこの部屋の敷居を
またいだとたん、罪もない観客めがけて襲いかかる、氣
の狂ったボクシング選手そっくりに、わたしに跳びかか
って来たのだが、クレマンティヌの毅然たる一声で、
そこそこそこへ逃げこんだのである。

その恨みと、人種偏見運動の元締めみたいな思いとを
たっぷりこめた眼つきで、犬どもは東洋から来たこの見
馴れぬ女客のほうを、ときおり、ちらちらと盗み見るの
で、わたしもクレマンティヌのお茶の接待にあずかり
ながら、負けじとばかり、にらみ返してやった。侍従長
ならともかく、犬にまで冷遇視される筋合はまったくな
いのだ。

「ねえ、ちびちゃん、わたくしが一人前の画家として世
に出るまでは絶対に結婚なんかしないと決心していたこ
とは、あなただって知っていてくれたでしょう？」

クレマンティヌは熱心にしゃべっていた。

彼女は真珠色の絹の部屋着をまとい、足には駝鳥の羽

根毛のついた華奢なスリパー（いわゆる日本で言う「ス
リッパ」ではなく、ちゃんとかかとのある、つかかけ型
の室内履き）を履いており、頸のまわりに、結婚祝いの
ささやかな贈り物としてわたしが少し前に手渡したばか
りの絹のスカーフを早速、結んで、同性のわたしが見て
も惚れ惚れするほど美しかった。ただ、その頬のあまり
の血の気のなさ、以前よりだいぶやつれて、やせたよう
に見えること、それだけがまずわたしの心にひっかかっ
ただけだ。

ロンバルド大公は彼女のどこに一目惚れしたのだろ
う？ あのすてきな脚？ 輝く緑の瞳？ あのいささか
も物怖じせぬ、闊達な態度？

この二人のセンチメンタルな、いかにも現代的な結
びつきについては、世界中の新聞が報道したし、日本で
もわたしはそれらの記事のいくつかを読んで、いたが、
どの新聞も雑誌も、そこまでくわしくは教えてくれな
かった。

「ええ、もちろん知っていたわよ、クレマンティヌ。
あなたはいつだってそう公言していたもの」

「それが——はっと気がついたら、『ブビイ』を愛して

いたわ」

「『ブビイ』？」

「いわゆる大公殿下。つまり、わたくしの良人と呼ばれている人のことよ」

クレマンティヌは肩をすくめ、鼻の頭にしわを寄せて見せた。

絹の部屋着と宝石づくめの指とにもかかわらず、その様子は依然として、冒険好きのいたずらな男の子のようだった。彼女が一枚きりのジーン・パンツの尻ポケットに両手を突っこんだまま、何も描いてないカンヴァスを載せた画架のまわりを、何時間何時間も夢遊病者のように歩きまわっていた姿を、昨日のことのようにわたしは思い出す。

「ここでは彼をそう呼ぶのよ、内輪ではね。彼のおばあさまも——正確にはひいおばあさまだけれど——先妻の息子も娘もみんなそう呼ぶわ。誰も彼を『ロンバルド大公ドミニコ・ヴィットリオ九世殿下』なんて呼びやしないわよ」

「ひいおばあさまと、先妻の息子と娘とがいるの？ ひいおばあさまと、先妻の息子と娘とが!？」

「そうよ。あらゆる意味で、たいそう興味深い人たちよ」

わたしは口をあめぐり開けた。

わたしだったら、王国を一つやると言われても、この縁談は敬遠していたにちがいない。

「おばあさまはね、古き良きロンバルド公国中興の祖、故ドミニコ・ヴィットリオ六世のお妃で、王朝唯一の正統の血筋を絶やさないように見届けようとがんばっていらっしやるの。もう九十歳を越していらっしやるけれど、そりゃあお達者よ。と言っても、さすがにこのごろでは、お迎えの近づいたことをご自分でも悟っていらっしやるようだけれどね」

クレマンティヌは、けろりとしたものだった。

「ヴィットリオ公は、その後、七世も八世も夭折したり暗殺されたりして、王朝は波乱の日々を過ごし、『ブビイ』の代になって、ようやく安定をみたのだけれど、それもつかのま、『ブビイ』の花嫁たちは結婚するそばから次々と謎の死をとげて、かわいそうに、『ブビイ』は四十五歳の今日まで、二人でいたより独身でいた期間のほうが長かったくらいなの。それで、六カ月前、王立美術館で偶然わたくしの姿を見かけたとき、この女性こそ、